

## 岩手医科大学歯学会第36回例会抄録

日時：平成5年6月26日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部4階講堂

### 演題1. 本学口腔病理学教室における病理組織検査の集計——平成4年度の集計——

○佐藤 方信, 藤井 佳人, 佐藤 泰生

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

我々の教室で平成4年度（1992年度）にとり扱った病理組織検査について種々の観点から集計し、若干の考察を加えてその結果を報告した。

この年度の検査件数は513件（男250, 女263）で、月別には1月が42件, 2月が39件, 3月が43件, 4月が41件, 5月が51件, 6月が54件, 7月が53件, 8月が35件, 9月が34件, 10月が48件, 11月が33件, 12月が40件であった。症例（356例, 男169, 女187）を年代別にみると50歳代79例, 60歳代72例, 40歳代52例, 30歳代36例, 10歳代34例, 20歳代31例, 70歳代26例, 9歳以下18例, 80歳代7例, 90歳代1例であった。歯原性腫瘍ではエナメル上皮腫4例, 歯牙腫4例, セメント質腫4例であった。非歯原性の良性腫瘍ないし腫瘍状病変では乳頭腫10例, 線維腫（線維性ポリープ）8例, 血管腫3例, リンパ管腫2例, 過角化症（白板症）11例, 唾液腺の多形性腺腫が2例, 色素性母斑3例, 骨腫（外骨症）3例, 上皮性異形成4例, 骨の線維性異形成2例, 黄色腫1例, 神経腫1例で、悪性のもものでは扁平上皮癌36例（男27, 女9）, 悪性黒色腫2例, 粘表皮癌1例, 腺癌1例, 腺様嚢胞癌1例であった。歯原性嚢胞では歯根嚢胞30例, 原始性嚢胞14例, 含歯性嚢胞6例であり、非歯原性では切歯管嚢胞3例, 術後性上顎嚢胞34例, 粘液瘤（粘液嚢胞）29例, 組織診断不能の嚢胞11例であった。炎症性病変およびその他の病変では歯根肉芽腫3例, 慢性過形成性歯肉炎（エプーリス）4例, 刺激性線維腫5例, 唾液腺炎（慢性）5例, アスペルギルス症1例, 放線菌症2例, 扁平苔癬9例, 上顎洞炎3例, 骨髄（骨）炎5例, アマルガム刺青1例, シェグレン症候群8例, ジランチン歯肉炎1例, 慢性炎症性（肉芽, 潰瘍）組織49例, その他30例であった。発生部位別には扁平上皮癌は舌12例, 歯肉10例, 口底6例,

頬粘膜4例, 口蓋2例, 上顎洞2例であった。乳頭腫は歯肉4例, 口蓋と舌が各々2例, 頬粘膜と口底が各々1例で、線維腫（線維性ポリープ）では舌4例, 頬粘膜3例, 歯肉1例であり、過角化症（白板症）は歯肉6例, 舌2例, 口蓋2例, 口底1例であった。

### 演題2. 年代別新来患者数の年次推移と現在歯数について

○戸塚 盛雄, 小川 光一, 福田 容子

岩手医科大学歯学部歯科予診室

80歳で20本の歯を残すことを成人歯科保健の目標として、1989年厚生省は8020運動を提唱している。今回、1983～1992年の10年間に岩手医大歯学部付属病院の新来患者を対象に、年代別患者数の年次推移と現在歯数について調査した。年間の新患総数では、男性は最低2345名, 最高2752名で平均約2500名であり、女性は、最低2931名, 最高3291名で平均約3000名で、年間の新来患者総数は10年間ほぼ一定していた。1年間の新来患者総数を100として、年代別新来患者数において、毎年30歳未満の患者が約50%, 30歳以上が約50%で、10年間ほぼ同じ比率であった。一方、60歳以上の患者の比率は、1983年、60歳代402名（7.2%）, 70歳代169名（3.0%）, 80歳以上が27名（0.5%）, 60歳以上の患者数は計598名（10.7%）であったが、1992年では60歳代591名（10.9%）, 70歳代224名（4.1%）, 80歳以上が62名（1.1%）であり、その内90歳以上が5名含まれている。60歳以上の年代において、いずれも増加しており、60歳以上は計877名（16.1%）となり、1983年時の約1.5倍と増加していた。

次に残根を含め現在歯数について検討した。1983年には50歳代の平均現在歯数は18.4歯, 60歳代：12.5歯, 70歳代：9.3歯, 80歳代：4.8歯であったが、1992年には50歳代：21.3歯, 60歳代：15.9歯, 70歳代：10.0歯, 80歳代：5.0歯であり、50歳以上の年代において平均現在歯数がいずれも増加していた。また全て

の年代において、男性の方が女性より歯数が多かった。1983年では40歳代より歯数が急激に減少しており、1992年では50歳代より歯数が減少していた。10年間の80歳以上の患者306名(90歳以上17名を含む)の歯数状態は、無歯顎:136例(44.4%)、1~4歯:55例、5~9歯39例、10~14歯28例、15~19歯:20例、20歯以上:28例(9.1%)であった。20歯以上有した28例の内、男性22例(12.4%)、女性6例(4.7%)であった。上下顎別歯数では、下顎の方が上顎より多かった。

演題3. 両側舌側縁部の異時性多発癌の1例

○大内 治, 小原 敏博, 八木 正篤  
 福田 喜安, 横田 光正, 大屋 高德  
 工藤 啓吾, 佐藤 方信\*, 中里 滋樹\*\*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座,  
 岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\*,  
 岩手県立中央病院歯科口腔外科\*\*

悪性腫瘍に対する治療効果の向上により重複癌あるいは多発癌は増加傾向にある。われわれは1975年から1990年までの過去16年間に口腔多発癌の6例を経験し報告してきた。最近さらに両側舌側縁部に異時性に出現した多発癌の1例を経験したので追加報告した。

症例は46歳の男性で、右側舌側縁部の高分化扁平上皮癌(一次癌:T2N0M0)で、術前化学療法としてPeplomycin計100mgおよびMitomycin C計20mgの静注を、また術前放射線療法としてEBの腔内照射を計20Gy行ったのち、全身麻酔下にて舌部分切除および中間層植皮を施行した。一次治療より2年1か月後に右側頸部に後発転移が認められ、右側全頸部郭清術を追加した。一次治療から9年9か月目の1992年9月頃より「7」の舌側縁部に、5×3mmのびらん形成性病変が認められた。しかしながら、臨床的に悪性所見に乏しかったため、「8」の歯冠形態修正および経口ビタミン剤の投与にて経過観察をしたところ、一時は縮小傾向を示したものの、消失には至らなかった。そこで悪性腫瘍を疑い、1993年2月24日局所麻酔下に切除生検を施行したところ、高分化扁平上皮癌(二次癌:T1N0M0)であった。術後3か月後の現在、外来にて経過観察中である。本症例はMoertelの重複癌の分類ではI-Aに属し、一次癌から二次癌診断までの期間は10年2か月であった。また、二次病巣が一次病巣と対称

的部位に発生したことより初診時および経過観察時には一次病巣だけでなく、口腔全体を十分に観察する必要がある。また、10年2か月後に発現した二次癌は硬結を伴わないびらん形成性病変として発現した。当初は歯牙鋭縁による慢性的機械的刺激による褥創が疑われた。したがって、このような病変は二次癌の可能性が高いので、刺激因子の除去のみでなく、早期生検の重要性が痛感させられた。

演題4. 局所的にみられた高度歯槽骨吸収例について

○高谷 直伸, 石丸 貴一, 梁川 輝行  
 熊谷 敦史, 菅原 教修, 松丸健三郎  
 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

日常の臨床で、深い歯周ポケットがごく狭い範囲に見られる例や、X線的には高度の歯槽骨吸収があってもポケットが明らかではない例に遭遇することが時にある。今回、男性6例、女性9例の計15歯部(40~67歳)で、このように診査時での病変の診断が難しかった症例を体験したので報告する。病変の確定診断は、通常の歯周診査に加え、外科処置時の肉眼所見や症例によっては抜去歯の形態などを参考にしながら行ない、原因に結び付くような要因が存在するの否かについて検索した。その結果、主訴では歯肉の腫脹が7例、咬合痛が4例、歯肉部の小腫瘍が2例、歯肉の不快感と歯の動揺が各1例であった。また15歯中4歯は生活歯であり、ポケットは弁剥離時に確認をした1例を除き、通常の診査で局所的に5~10mmを示していた。臨床診査や治療過程で15歯部中失活歯の11歯部には何れも歯根破折が確認され、破折面に沿って深いポケットや高度の骨吸収が見られた。生活歯の4歯部では下顎前歯2歯部には裂開、1歯部には歯根面溝また残りの1歯部には舌側隅角部に下部歯槽骨欠損と連絡する細く狭い交通路が認められた。

今回の検索から、通常の診査からは病因が明らかでない症例の多くは40歳以降の中高齢層の人に生じており、7割強が歯根破折であったこと、及びそのほかは解剖学的に頰側歯槽骨が薄く裂開が生じやすい下顎前歯部であることなどが判明した。これらのことから、支台築造を伴う失活歯の修復時には細心の注意が必要であるとともに、診査時には歯槽骨裂開、根面溝やエナメル突起など歯周組織や歯の解剖学的形態、顎骨と歯槽突起の形態的関連などを踏まえた検索が必